

若手邦楽聴き比べ



【開催日】平成30年8月22日（水）

【会場】東京都美術館 講堂

【主催】邦楽実演家団体連絡会議

【助成】アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）



長唄

「鞍馬山」

唄

東音 守屋沙弥香 笛 福原洋音
東音 安岡麻里子 小鼓 堅田喜代実
東音 横山沙永子 大鼓 望月太左乃
太鼓 福原千鶴

三味線

東音 河野文
東音 林万里子

上調子

東音 坂田舞子

江戸市村座で安政三年十一月、鞍馬山での牛若丸と烏天狗の立ち廻りの場面に使われた舞踊曲です。語り物である浄瑠璃の手法を多く用いて、冒頭の鞍馬山の描写は勇壮な大薩摩、命を助けられた幼少時の述懐はクドキで表現しています。立ち廻りから天狗が風を巻き起こして飛び去る段切れまで、変化に富む展開です。上調子による旋律の装飾、「セリの方」「早笛」など囃子の効果といった楽器の活躍にも注目して下さい。二世杵屋勝三郎作曲。

詞章

本調子へ へそれ月も鞍馬の影うとく 木の葉おどしの小夜あらし 物
さわがしや貴船川 天狗倒しのおびただしく 魔界のちまたぞ恐
ろしき へここに源家の正統たる 牛若丸は父の仇 平家を一太
刀恨みんと 夜毎詣ずる多門天 祈念の疲れ岩角に 暫しまどろ
む肘まくら へ思い出せば 我いまだ三歳の時なりしが 母常磐
が懷に抱えられ 伏見の里にて宗清が 情けによりて命助かり
出家をせよと当山の 東光坊に預けられしも 数えてみればひと
昔 十余年の星霜経れど 幼心に忘れずして 今のあたり見たる
夢 それにつけても父の仇 剣道修行なすといえども 我一向の
生兵法 願えば神の恵みにて 本望遂ぐる時節を待たん へイデ
や琢磨の修行をなさん へ木太刀おとり身がまえなす 時しも

琵琶

「須磨の敦盛」

琵琶 田口彩香

俄に風起こり 天狗礫のばらばらと 鳴動なしてすさまじし 遙
かの杉の梢より 又もや怪しの小天狗 木太刀うち振り立ち向か
えば へシヤ小賢しと牛若丸 つける木太刀を払いのけ 上段
下段早速の働き 勝負いかにと霧隠れ 後ろに窺う僧正坊 優り劣
らぬ兩人が 木太刀の音は訝して めざましくも勇ましい へさ
しもの天狗もあしらいかね 跡を晦まし失せにけり 跡を晦まし
失せにけり

詞章

平清盛の甥にあたり、笛の名手とうたわれた平敦盛と、源氏の「剛の者」
熊谷の短い邂逅を描いた物語です。若くして命を散らした敦盛の物語を
語る琵琶歌は、さまざまな流派に存在しますが、錦琵琶には3曲の「敦
盛」があります。「青葉の笛」「花の敦盛」そしてこれから演奏する「須
磨の敦盛」です。敦盛の美しさ、凛々しさを伝えながらも、熊谷次郎直
実という一人の武士の葛藤を描いています。熊谷が馬を海に入れ、「返せ、
戻せ」と敦盛を呼び寄せ、敦盛がそれに応じて馬を返し、二人が刀を合
わせるくだりは水際で馬がいななき、二人の武士が切り結ぶ様が表現さ
れた力強く美しい弾法です。情景を想像しながらお楽しみください。

須磨の浦波 風なきて まだ明けやらぬ暁の 沖にただよう戦船
源平戦う 一の谷 敗れて落つる平家方 渚の砂を蹴り立てて
御座船目指し逃れ行く
素駒の末に駒止めて あわれ良き敵に組まばやと 待つは源氏の剛
の者 熊谷の次郎直実なり 折しも浮きつ沈みつ波がしら 乗り
遅れたるただ一騎 紺地錦の直垂は 水際立つてぞ見えにける

熊谷ざんぶと駒を海に入れ 大將軍と見奉る 笑止や敵に後ろを見せ給うか 返したまえ 返したまえ さつと開ける日の丸の 軍扇上げて差し招く

波間に浮かぶ 鞍の上 敦盛につことほほぞ笑み 取つて返すや 水煙 重藤の弓かなぐり捨て 月毛の駒のいななきに 勇む誓の一騎打ち 火花を散らし切り結び 馬と馬とを馳せ並べむんと組みて揉み合えば たちまち鎧踏み外し 波打ち際に どうつと落つ取つて押さえし熊谷は 左右の膝に敦盛の鎧の袖を引き据えて 早くも首をかかんと さしのぞきたる 内甲(かぶと) あな無惨 思いもかけぬ十五六 花かともう薄化粧 かね黒々と染めなせる いとも優しき若君に さすが剛毅の熊谷も 一子小次郎直家を そぞろにしのぶ親心

助け起さんとしたる時 木霊にひびく 時の声 土肥、梶原の五十余騎 生田の杜を抜け駆けて 落つる平家の強者を 逃さじものと迫り来る

ためらふ熊谷是非もなく 許させ給え御首級 我は武蔵の国の住人 熊谷次郎直実とて 日本一の剛の者 刃に隠す武士の 情けを君も知ろし召せ

よくこそ申させ給ひけれ熊谷殿 我こそは参議経盛が末子にて 無冠の大夫敦盛なり 生年十六を一期とし 御身に討たれ花と散る 宿世の縁 嬉しやと 覚悟の声に熊谷は 拳に涙しめらせ 我が子も同じ敦盛の 首討ち取りて 引き上ぐる 涙を隠す かちどきや

常磐津

「雷船頭」

浄瑠璃 常磐津若羽太夫
常磐津千寿太夫
三味線 常磐津美寿郎
岸澤満佐志

「夏船頭」とも。天保十年(一八三九)三月、河原崎座初演。沢村訥升(のちの五世宗十郎)の演じた四季の所作事のうち夏の部。秋の部は同じ常磐津の「屋敷娘」。三世並木五瓶作詞。

江戸時代の船頭は粹な人物の代表とされて、舞踊にも多く登場します。

詞章

常磐津には「夕月船頭」、清元には「大津絵船頭」などがあります。首拔きの縮緬浴衣という派手な船頭と、太鼓を背負って虎の皮の褌をした雷との取り合わせは、野暮と粋の対照をねらったものです。

夜風 山風 富士下し 筑波ならひに 両国の眺め 花火の賑ひは 高尾川一 吉野丸 屋台囃子に 騒ぎ唄 心隅田の川つぎ

「モシ旦那 お忘れ物がありやすぜ モシ 旦那、旦那は先へ行つてしまつたし コリヤどうしたら 良からうな」 ほんに思えば うたかたの 阿波座 鴉じゃ なつけんけれど可愛い可愛いが 身のつまり

今じゃ浮世を 水浅黄 向う鉢巻 向う見ず 流れ渡りの 気も軽く 粋な水道の 勇み肌 「コリヤ大分むし暑くなつて来た」ッ降り来なきやいいがナア」 折りから夕立 稲光り あたり見廻す有様は 恐ろしくも又物凄き

妙だ 妙だ こいつア妙だ こいつア妙だ さて又 次の雷は 雲と雨とに 誘われて ゴロゴロ ガラガラ びしゃりと下り藤 どなたも さようじゃ や……どつと降つたり オヤ おつこちたなら 亀井戸で この頃は

やる コレ 開帳へ 出してわつちは もうけ口 兎角浮世は 色と欲 徳利引き受け手酌のみ

その間に逃げる 雷の 下帯取つて 「コレ待つた」

何じやいな

そもやお前と 馴れ初めは 去年の文月 文つけて 天の河原の夕涼み

夜の明ける迄 蚊に食われ しつぱり濡れし 夕立の 晴れて口惜しき 雲のうち ツイ 乗り易き むら雲は

あんまりつれない どう欲な これなアモシ 笑い顔見せて下さんせ 心強やと 取り纏れば 訳は知らねど 鬼の目に グワ グワ グワ

フグワグワグワグワ 涙催す 花曇り

これじやいかぬと 又ぐい飲み 酒の期限に廻る舌 廻る物なら 風見の鴉 娘系縁る 庄屋が

くわえ煙管で 野良廻る 親父や焼餅で 氣を廻す 夜は鉄棒 エーンエーン 火の用心 さつしやうやしょう 二階も廻る 茶碗

酒 昼も吸いつく 蛸女郎 洒落た世界じゃ あるめえか わしとお前は ござつて同志 あつちへござつて 竹槍一本ありや

裸百貫 脛一本 狼出れども 猪出れども 何の事アね そうじやわいな そこがお江戸の水育ち 是も弥生の わざくれや 日よりもよしや 吉原へ 送る太鼓の音につれ 早や夕立のさつさと 竹屋をさして 急ぎ行く

小唄 ①「空や久しく」

②「こうもりが」

③「川風」

④「晴れて雲間」

⑤「夕立やさつと」

⑥「涼しげに」

唄 千紫秀巳
糸 千紫巳恵佳

唄 春竹利保
糸 春竹利香

唄 蓼時あや
糸 蓼胡満佳乃

①都以前の曲によるもので、短い曲の中に藺八節、一中節、清元節が

うまく取り入れられている江戸小唄

②七代目市川団十郎が一八二九年五月大阪中の芝居に初出演した時の唄

七代目は（歌舞伎十八番を選定した俳優で、荒事、立役、敵役、女形など不得手な役のない名優で、天保改革（一八四三）の時江戸払いとなり、数年間大阪で生活しました。蝙蝠、福牡丹は何れも市川家の紋。

荒い仕掛けは市川の荒事にかけています。北浜は大阪の地名。大阪の

歌舞伎ファンが七代目の来坂を喜び「去なさぬ」と褒め讃えた小唄で、歌沢でも唄われています。

③江戸時代の夏の隅田川の船遊びは、江戸詰めの留守役や、商人の接待、

お屋敷の侍が酒の席がはずんで出掛けることが多く、行く先の多くは向島あたりから大川筋を上流に流すコースが多かったそうです。

冬は障子をしめ切り、夏は簾が小縁まで下りていて、船頭の姿は見えないのが決まりでした。

④この小唄は歌舞伎の下座唄として一八五三年「切られ与三」の源氏店の場、「小猿七之助」の土手場等で使われていましたが、明治になって

江戸小唄化され、今日も盛んに唄われています。

⑤明治中期に作られた江戸小唄。江戸時代からの夏の題材として欠かせない「夕立」「雷」「蚊帳」の三題が揃って縁結びで終わる小唄らしい洒落た小唄です。

詞章

①空や久しく雲らるる 降らるる雨も晴れやらぬ 濡れて色ます
青柳の糸のもつれが気にかかる

②こうもりが出て来た浜の夕涼み 川風さつと福牡丹 荒い仕掛けの色男 去なさぬ去なさぬいつまでも 浪花の水にうつす姿絵

③川風に つい誘われて涼み船 文句もいつか口舌して、粋な簾の風の音に 濡れて聴こゆる忍び駒 粋な世界に照る月の中を流るる隅田川

④はれて雲間にあれ月のかげ さしこむ腕に入黒子 もやい枕の蚊帳のうち いつか願いもオヤ、モシ 雷さんの引き合わせ

⑤夕立やさつと吹きくる闇の戸に ぴかぴかお恐わ 雷さんは恐れけど 私が為には出雲より 結んだ縁の蚊帳のうち 憎や晴れゆく 夏の空

⑥涼しげに水の音する柳かげ 月にかくれて飛ぶ螢

邦楽実演家団体連絡会議

一般社団法人義太夫協会	清元協会	一般財団法人古曲会	新内協会	特定非営利活動法人筑前琵琶連合会	常磐津協会	一般社団法人長唄協会	一般社団法人日本小唄連盟	公益社団法人日本三曲協会	公益社団法人日本三曲協会	日本琵琶協会	一般社団法人大阪三曲協会	一般社団法人関西常磐津協会	公益社団法人当道音楽会	名古屋邦楽協会
-------------	------	-----------	------	------------------	-------	------------	--------------	--------------	--------------	--------	--------------	---------------	-------------	---------